

謡曲〈朝長〉の二つの「語り」

——青墓長者の「語り」から朝長霊の「語り」へ——

岩城賢太郎

一 謡曲〈朝長〉をめぐる

謡曲〈朝長〉は、世阿弥が金春禅竹へ相伝した能本目録と見る説が有力である『能本三十五番目録』に「トモナカ」、康生二年(一〇六六)奥書の禅竹『歌舞随脳記』に「大夫進朝長」とその名が見え、世阿弥の晩年には成立しており、作者は、観世十郎元雅(永享四年(一三二二)没)ではないかとする説が有力である。

源朝長を弔うために都より美濃国青墓に下ってきた僧(ワキ)は(1・2段)、墓所で朝長を弔う青墓宿の長者(前シテ)と会い(3・4段)、朝長の最期の様を聞き(5段)、宿へ誘われて、供養を勧められる(6・7・8段。9段は間狂言の語り)。僧が観音懺法で朝長を弔っている(10段)、朝長の幽霊(後シテ)が現れ(11・12段)、親兄弟の末路と自身の最期を語り回向を頼んで消える(13・14段)。

以上が大まかな構成だが、世阿弥作の修羅能に比べ、前シテが青墓宿の長者(女性)で後シテは朝長の幽霊という、前・後場に別人格のシテが立てられ、その別人格のシテを同一役者が演じる形式は特異である。三宅晶子氏は、『藤戸』(船弁慶)等、シテ一人二役という形式の作品群の中で(朝長)は最初に作られた作品であろうとし、「朝長型」とされている。

待賢門夜軍の敗戦から青墓宿へ落ちて来た源義朝一行についての「いくさ語り」を骨格とする前シテ青墓長者の「語り」と、義朝父子の末路と朝

長自身の最期を骨格とする「いくさ語り」をする後シテ朝長の霊の「語り」と、この曲は二つの「語り」を柱としている。軍記文芸に取材する修羅能等の謡曲作品は、作品の中核を成す「いくさ語り」に相当する内容の「語り」を、「語り」や「クセ」、又は一曲結末の(中ノリ地)等の小段に構成しているが、前場に「語り」の小段を持つ修羅能は(八島)〈知章〉等、数少なく、多くの修羅能は後場に配される「語り」の小段が「いくさ語り」の中心である。

ところで、世阿弥作の能を尺度として修羅能の諸作品を見た場合、天正頃の写と見てよい堀池・淵田百拾九番本〈朝長〉は、次に掲げるように2段のワキ僧とアイの青墓長者の従者との「問答」に、興味深い詞章が見られる。

「淵田」(問答)詞「急候程に。美濃ノ國あふはかの宿に付て候。此あたりの人の渡り候か

ヲカシ(「妙庵」狂言者ノアイシライ也)「誰にて御さ候ぞ

ワキ「都遍ヨリ下たる僧にて候。あふはかの長者の(「妙庵」ワウ

ハカノ宿ノ長者ノ)在所はいづくにて候ぞ

ヲカシ「長者の御在所(「妙庵」長者ノ在所)ハあれに見えたる所に

て候。(「妙庵」長者ニ)あひ申されたく候ハ、しはらく是に御待候へ。

此あを野が原に(「妙庵」ナシ)朝長の御むしよの候に。毎日御参候今日ハ未御参りなく候程に。唯今是(御出候へ)是にてあひ申され候へ

ワキ「荒嬉しやさらば彼むしよへ参て待申候べし

アイとの問答であるため管見の大半の伝本にはこの「問答」の詞章は記録されていないが、判読不明箇所が少々あるものの、括弧内に示したように、妙庵本がほぼ同じ本文を書き入れている。青墓宿へ至ったワキ僧が「長者の在所」を尋ね、それに応じてアイ長者の従者は長者の住処を示し、青

野が原に朝長の墓所があることを教えるわけだが、現行（朝長）ではワキ僧は朝長の墓所を尋ねるかたちになっており、淵田・妙庵本とは異なる。

他本がこの詞章を記しておらず、室町末において、この問答が（朝長）演能の定型と言えるかどうかは不明であるが、ワキ僧は青墓にあると聞いた墓所を尋ねて来たわけではなく、長者の女性を尋ねてきているのである。これは、世阿弥の修羅能において、諸国一見のワキ僧が偶然に前シテと出会い、その地に纏わる「いくさ語り」を聞くという構成とは異なっている。

ワキ僧は、朝長の最期に関わりがあるはずの長者の存在を知って長者を訪ね、朝長の最期について尋ねようと都から下ってきたのだ。つまり、この淵田・妙庵本の詞章に従えば、青墓長者の「語り」がこの後に構成されるのは必然の展開である。淵田・妙庵本は、冒頭から、これから展開される前シテ長者の「語り」に備えて「問答」の詞章によって布石を置き、「語り」の展開を促すという一曲の構成の方向が見受けられる。現行の演出と比べると、前シテの「語り」を強く意図した「問答」と言える。

本稿では、謡曲（朝長）について、作品の骨格を成す「語り」の詞章、取り分け前シテ青墓長者の「語り」に注目し、伝存する室町末期から近世初期にかけての（朝長）諸謡本の本文を比較・検討することで、「語り」が謡曲（朝長）の構想にいかにか深く関与しているかを分析し、併せて、前・後場別シテ型の作品として成立した経緯についても私論を試みたい。

二 諸役の設定における特殊性

〔松井〕（名ノリ）ワキ僧詞「かやうに候者ハ都かたにすま居する僧にて候。扱も此度保元のみたれに。義朝都を御ひらき候中にも。大夫の

しんともなかハ。みのゝ國あふはかの宿にて。じがひしはて給ふ由承候。われらも朝長のゆかりの者にて候程に。彼所にくたり。御跡をも

とふらひ申さんとおもひ立て候

〔下間〕（名ノリ）僧ことハ「是ハさか清冷寺より出たる僧にて候。さ

ても大夫進朝長ハ。都大くつれにておもてをひ。みのゝ國あふはかの宿長者の屋にて自害しうせ賜ひて候程に。御跡をとふらひ申さんため。只今あふはかの宿へと急候

冒頭のワキ僧のこの名乗りが続く「上哥」／＼あふみちやせたのながはしうちわたり……を経て、ワキ僧は（朝長）が展開する作中場面である青墓宿に至る。詞の部分でもあり、ワキ登場の段は伝本によって異文が多く見られるが、（朝長）の場合は作品の展開に関わる程の異文が多い。

ワキ僧が「都がたにすま居する僧」と名乗るのは松井本以外は妙庵・松平・下間本のみで、他本や下掛り系本は「さが清冷寺より出たる僧」、妙庵本も「西山サガシヤウリヤウ寺ニスム」と訂している。又、「此度保元のみだれに……」の一句は、上掛り系本の台詞であつて下掛り系本には見られない。松井・元忠・宗節・身愛本以外の上掛り系本と、妙庵本の訂正は「平治の乱」である。石田・元和本は親世黒雪（身愛の関わる本だが、身愛自筆の身愛本は「保元のみたれに」とあり、この異文は近世初期まで引き継がれている。単に誤りとするべき本文ではない。

ワキ僧は朝長の自害に触れ、淵田・堀池・妙庵（訂正）本を除く上掛り系本は朝長縁故の者と名乗る。これは、4段の長者との「問答」の先取りとなる。シテと縁の人物がワキ僧として設定されると、見所は、作中人物と自分達見所との時間の距離を測り、作中時間を知るわけだが、（朝長）の場合、シテの自害についてワキ僧は述べてしまふのであり、朝長追悼の下向であることは明白である。

但し（朝長）では、以後に展開する「語り」の詞章が先取りされる詞章が見られる。下掛り系本に「都大くづれにておもてをひ」とあるのは、前

シテ青墓長者の「語り」の中で語られる朝長の負傷の様であり、澗田・小宮・堀池・妙庵(訂正)の各本は、「都大くづれにひざのくちを射させ」と負傷の様はさらに詳細になっている。特徴的であるのは、前シテ長者の「語り」の詞章がワキ登場の作品冒頭段から引用されていることである。下掛り系本(小宮本)は、「みのゝ國あふはかの宿長者の屋にて自害し」とあるが、これはさらに前シテの人格をも予告している形である。

青墓長者登場後の4段はワキ僧とシテの問答である。シテの「不思議やな此墓所へハ。我ならでハ七日ノくに参。とぶらひ申人もなきに。旅人とおぼしき御僧の。涙をながしとぶらひたまふハ。とりわきたる御心ざしにて候やらん」(下間本)との問い掛けに、ワキ僧は「是ハ朝長のゆかりの僧にて候が。此あふはかの宿にてはて給ひたるよし承及。とくにも参たくハ候しかども。いま程のことハ怨敵のゆかりをバ出家の身をもゆるさず候程に。とそう行脚にミをやつし忍びて下向仕て候」(下間本)と、朝長自害の件を繰り返し、「いま程の……」以下の事情を答える。(朝長)の前場に關して先覚が指摘されている現在能的性格は、この對話劇的な詞章にも現れているのだが、澗田・堀池・妙庵(訂正)本以外の上掛り系本は、「是ハ朝長の御ゆかりの者にて候が御跡とぶらひ申さんためにこれまでまいりて候」(松井本)と、ワキ僧の応答は筋略化され、その応答は続く問答の中に挿入され、上掛り系本と下掛り系本とで、詞章の前後がある。

そして、シテの「扱々朝長のゆかりとハいかなる人にてましますぞ」(下間本)の問い掛けに対して、「是ハ朝長の御めのとこ」なにごしと申し者なるが。さることありて御いとま賜りはや十ヶ年に及候」(下間本)と、かつて朝長の乳母子であったことを語る。ワキ僧が、シテ朝長と極めて近い関係の人物であることが「問答」を経て明らかにされるが、ここは、上掛り系本は「御めのと」(松井本)としており、下掛り系本と設定の違いを見せる。

下掛り系本も道入本は「御ものとをや」、室末本は「御乳母士」とである。このような設定で(朝長)は展開していく。

三 前シテ青墓長者の「語り」の特徴

前場の中心、青墓長者の「語り」は続く5段である。この「語り」は諸本間で異文が多く、それぞれが長者の「語り」を探る重要な要素となっている。ここでは、下掛り系諸本として天正期写の下間本を、上掛り系本として大永々天正期写の松井本を主として取り上げ、上掛り系本と下掛り系本とを対照することで長者の「語り」の在り方を考えて行く。

5段の前シテ青墓長者の「語り」に先行する「問答」においても、諸本間で様々な違いが見られる。例えば小宮本では「実々かり初の御名残ばかりに。か様に弔給ひ候事。返々も有がたふ候。」(妙庵本書き入れもほぼ同文)と、かつての傳としてのワキ僧の素性故か、長者への謝意が見られる。上掛り系本は、シテ「いかに申候。朝長の御さいこのありさまくわしくかたつて御きかせ候へ」ワキ「其時の有さまくわしくかたつてきかせまいらせ候べし」(松井本)と、形式の整った「問答」の小段が先行している本が多いが、下掛り系本は、ワキ僧の「扱々朝長の御最後のしぎ何とか御座候つる」(下間本)を受けて、直ちに長者の「語り」が続く。

「下間①」(「語り」して其ときの有さま申につけてもいたハしや。暮し年の八日の夜にいりてあらけなく門をたゞく音す。誰なる覽とこたへしにかまた殿とおせられし程に。門をひらかすれハ。物のくしたる人四五人うちへ入賜ふ。義朝御親子がまた金玉丸や覽。わらハか所をたのミおほしめされ。一夜をあかすへしと仰られし程に。其まゝたのまれまいらせ。明なは川舟にめされ野まのうづみへ御入あるへしとなり。

「松井①」(「語り」シテ「申につけていたハしや。暮し年の八日の夜に

いりて。あらけなく門をたゞくをとす。誰なるらんとこたへしに。鎌田殿と仰られし程に門をひらかすれハ。物のくしたる人四五人うちに入給ふ。よしとも御おやこ鎌田金丸とやらん。わらハを頼ミ給ひ。一夜のおやと仰られし程にたのまれ申す。明なは川舟にめされて。野間のうつミとやらん御落有へきとなり。

長者の「語り」は、「暮し年の八日の夜」と、この「語り」の話中の時間の提示に始まり、続いて「義朝御親子かまた金丸とや覽」と「語り」に登場する人物が掲げられる。「誰なる覽とこたへし」といったこと、話中人物の発言を中心に構成されるこの小段は、長者と義朝一行とで交わされた言葉を織り込むことで「語り」の話中場面の再現を志向する。「暮し年の」「こたへしに」「おせられし程に」「仰られし程に」等と直接体験を示す語で続けられる文体は、後場は段の「つゐにちうせられにけり」「是も都へぞとられける」「下間本」という、朝長の幽霊が現世を回想して語る「クセ」と比べて対照的である。義朝一行に接した者の直接の体験談としての「語り」の特徴が、「き・し・しか」叙述にも反映されている。

上掛り系本との差異を見ると、長者が「野間のうつミとやらんへ」（但し潤田・妙庵（書入）・堀池・石田・元和・福王本は下掛り系本と同じ、宗節本は「野間のうつミへとやらんへ」と、隣国尾張の土地を不確かな述べ方で語るのか判らないが、続く詞章から見ても、この「語り」においては意識して土地の名の提示がなされていると考えられる。上掛り系本と下掛り系本とでは地名の提示における意識の違いがあるらしい。

義朝一行の青墓入りを語った長者は、話題の中心の朝長に視線を移す。「下間②」去程に朝長ハ。都大くつれとや覽にてひさのくちをいさせ。と

かくわつらハせ給ひしか夜ふけ人しつまつて。朝長の御聲にて南無阿彌た佛と二聲のたまふ。こハいかにとてかまた殿参り。朝長の御腹め

されて候やと申されけれハ。義朝おとろき御覽するにはや。御はたきぬも紅にそミてめもあてられぬ有さまなり。かまた殿かへ申され。義朝何とてしかいするそと仰られけれハ。朝長いきの下にて。

「松井②」又朝長ハ都大くすれとやらんにてひさの口を射させ。とかくわつらひ給ひしが。夜ふけ人しつまつてのち。朝長の御聲にてなむあミた仏くと二聲の給ふ。かまた殿まいりこハいかに候。朝長の御しかひ候と申させ給へは。よしともおとろき御覽すれば。はや御はたきぬもくれなぬにそみて。めもあてられぬ有さまなり。其時よしとも何とてじがひしけるそと仰られしかは。朝長いきのしたにて。

朝長の負傷と自害の件は、長者自身が見たこととしてではなく話中の人物である義朝・鎌田正清の言葉や行動を通して語られ、「語り主」である青墓長者の存在は後景化される。だが、この手法によって、「語り」の時間と話中の時間の隔絶は縮められ、長者が実際に目にした場面の緊迫感と凄惨さが克明に再現されることとなる。

先の下間本①の「語り」の引用に点線を付したが、この下間本②も、点線部の通り、下掛り系本の「語り」は上掛り系本と比べ息の長い文体となっている。正清と義朝の言動が繰り返し入れ替わるのであるが、語り主は言動の主体である人物について「かまた殿」「義朝」と名を差し挟むのみで語り続ける。目まぐるしく入れ替わる語り主の視線は、緊迫した場面を伝える効果はあるものの、「こハいかにとてかまた殿参り。朝長の御腹めされて候やと申されけれバ」では、場面の展開や人物の言動に隔絶・省略が生じる。

上掛り系本では、下間本②の点線部に対応する部分は「かまた殿まいり」と申させ給へば。よしともおとろき御覽すれば。めもあてられぬ有さまなり。」と本文を移動させて言動の人物を先に掲げて語り、「其時よしと

も」という語り出しの語句に接続する詞章となつてゐる。下掛り系本の「語り」が未整理で、分かり難い文体となつてゐる感は否めない。

下間本②に見える「御腹めされて候やと申されければ」「義朝何とてじがいするぞと仰られければ」という下掛り系本の本文を、上掛り系本がそれぞれ「御じがひ候と申させ給へば」「よしとも何とてじがひしけるぞと仰られしかば」とする点も、表現を改めることで、この「語り」を直接体験を示す文体で一貫しようとする、上掛り系本の意図的な方向が窺える。

先の下間本①の「義朝御親子かまだ金玉丸とや覽。一夜をあかすべしと仰られし程に。其まゝたのまれまいらせ。明なば……御入あるべしとなり」の部分では、その間に、一夜の宿を頼まれた語り主長者の一文が主体の明示もなく挟まれているが、上掛り系本では「よしとも御おやこ鎌田金玉丸とやらん。……一夜のおやど、仰られし程にたのまれ申す。明なば……御落有べきとなり」と、「たのまれ申す」で一旦区切つてしまい、「語り」を聞く見所にとつて分かり易い語り口となつてゐる。妙庵（書入）・小宮・元忠・宗節・身愛・石田・元和・福王本の上掛り系本は、この長者の「たのまれ申す」の一句を持たないのである。

以上のことから判断すると、仮に謡曲作者が最初に創つた原（朝長）の存在を想定した場合、上掛り系本的な長者の「語り」から下掛り系本の「語り」の詞章が派生することは考えられない。恐らく下掛り系本の「語り」が原（朝長）の詞章の性格を伝えており、上掛り系の詞章は、分かり易さを指向して、意図的に整理・改変された、後出の「語り」であろう。

続いて（朝長）の「語り」は、詞から曲調のある節に転調し、自害の際の朝長の最期のことばが語られる。

〔下間③〕下／さむ候大くつれにてひさのくちをいさせ。すてに難儀に候ひつるを。馬にかゝり是までハ参りて候へ共。今ハ一足もひびいづへ

くも候ハす。路次にてかたきにも逢ならハ。いぬしにすへく候あひたしかいつかまつり候。たゝかへすく御せんとをも見とゞけ申さてかやうに成候こと。さこそゆいかいなき者とおほしめされ候へきなれとも。路次にて捨られ参せハ。雑兵の手にかゝらんことあまりに口おしうさぶらへは。爰にておいとまたまハらむと

（歌）同下（同音）是を最後の御詞にて 同吟 こときれさせ給へは。義朝まさきよとりつきて。なげかせ給ふ御有さまを。よそのみるめもあはれさをいつか忘れん。

〔松井③〕下クトキ／さん候都大くつれにてひさの口を射させ。既になんきに候しか。馬にかゝりこれまでハまいりて候へとも。今ハ一あしもひかれ候ハす道にてすてられ申ならは。いぬしにすへく候。たゞ返々も御せんとをも見とゞけ申さて。かやうになり行候事。さこそゆひかいなき者とおほしめされ候ハんすれとも。路次にてかたきにあふならは。雑兵の手にかゝらん事。あまりにくらおしう候へは。是にて御いとまたまハらむと（以下、下間本二同ジ）

この部分は長者の「語り」を紹介した生前の朝長のことばの再現である。話中の焦点人物の移動が、ここまで見られた直接体験の文体ではなく、現在時制の語り口をとらせたのである。前・後場同一人格のシテを基本とする複式夢幻能においては、曲中に生前のシテ自身のことばが直接示されることは稀であるのだが、（朝長）の場合、前場と後場は別のシテであり、しかも前シテが朝長自害に立ち会った人物であるからこそ、後シテの現世におけることばを再現することが可能なのである。

この朝長の述懐は、低音で謡われる節扱いであり、松井本のように、上掛り系本の淵田・小宮・堀池・松平本には「クトキ」の注記が見られる。「クトキ」とは歎息・苦惱等の内容を低音域で謡う小段である。現行諸流

ではこの朝長のことばを「グドキ」としては扱っていないが、早く室町末期から、長者による長大な「語り」の中において、朝長の述懐が効果的に浮き上がるよう意図され、詞章が構成・飾付けされていたと見られる。

武者としての自覚故の悲痛な朝長の心情吐露は、「大きくづれ」で負った傷の件から語られるが、この都の地名についても、松井本はじめ上掛り系本は「都大くづれ」と、改変の痕跡なのか説明調の詞章となっている。下間本②に見られたように、長者のことばとしては「朝長ハ。都大くづれとや覽にてひざのくちをいさせ」と都の地名を不確かなものとしているのに対して、長者・朝長という「語り」における発話者の素性を考えると、下間本以下の下掛り系本の「語り」の詞章が妥当と思われる。

だが、「大くづれ」や「野まのうつみ」といった土地の名の提示は、この「語り」においては重要な要素の一つであり、朝長の最期という緊迫した場面を長者の「語り」によって克明に再現して語り伝えるべく、この「語り」の小段は重視されてきたと見てよい。下掛り系本的な詞章と、意図的な改変がなされたと思われる上掛り系本的な詞章と、本文の性格を異にする二つの「語り」の詞章が、早くから伝存したことを重視したい。

「其ときの有さま申につけてもいたハしや」（下間本①）と語り起こされた長者の「語り」は、最後に「よそのみるめもあはれさをいつか忘れんと結ばれる。やはり長者自身の心情をあらわす詞章は、「語り」の中に差し挟まれることはない。「語り」の中心を構成した後には、語り手たる長者の心情が前後に添えられ、詞章の整備が図られた見ることが出来る。

以上に見てきたような（朝長）の「語り」の特異性は、謡曲一般における「語り」の詞章の構成法と比較すると、より鮮明である。

先ず、前・後場別シテであることから（朝長）と併せて論じられること

の多い（藤戸）を取り上げる。次に掲げるのは、上掛り系堀池宗活章句本（藤戸）の前場のワキ佐々木三郎盛綱の「語り」である。括弧内には下掛り系車屋本（「車屋」）の主な詞章の異同を示す。⁵⁾

〔堀池〕物語（「語り」）「さて藤戸の先陣を渡し事は、かねて案内を存しゆへ也。さて去年三月廿五日の夜に入て。浦の男を一人近づけ（「車屋」）かたらひ、此海を馬にて渡すへき所や有と尋ねしに。彼者（「車屋」）彼男申すやう、さん候川の瀬のやう成所か一所候（「車屋」）ただ一通り候。月かしらに東にあり。月のするにハにしに有よし申（「車屋」）にしに候と申す。則八幡大菩薩の御つけそと思ひ（「車屋」）ナシ、盛綱家子トツツク。いへの子若黨にもかくれ。彼男とたゝ二人夜にまきてしのひ出。よくくあさせをしりて帰りしか（「車屋」）彼男とただ二人あさみをよく知りすまして帰りしが。もりつな心に思ふやう（「車屋」）もりつなきつと思やう。いやく下らうハ筋なき者（「車屋」）どこともなき者にて。又もや人に語らん（「車屋」）又人にかたははされかたる事もや有るべきと思ひ。ふひんには候つれ共（「車屋」）ナシとつて引よせ。二刀さいて其まゝ海にしまつて帰りしか（「車屋」）彼男を取つて引きよせ二刀さし、あの海に沈めて帰りしが。さてはなんちか子にてありけるよな（「車屋」）其者の母にて有るな。…

「さて」という常套的な言葉で語り起こされるワキ盛綱の「語り」は盛綱自身の体験を語るもので、（朝長）における長者の「語り」とは性格を異にするが、後シテ藤戸の浦の男の幽霊の生前の言葉が含まれていることは（朝長）と同じである。しかし、その藤戸の浦の男の言葉が「さん候川の瀬のやう成所が一所候」と再現されるものの、後には、「月のするにハにしに有よし申」というふうには、語り手自身の言葉に纏められてしまう。車屋本の場合には「にしに候と申す」と、話中人物の言葉を語り手自身が示

すわけだが、傍線を付したように、語り手自身も含めた話中に登場する人物に関しては、全て説明口調で語られる。語り手自身の心中でさえ「もりつな心に思ふやう……又もや人に語らんと思ひ」というふうには、客観的な視点で説明的に語られる。一人称的な「語り」に客観的な三人称視点の混ざってくることは夢幻能の靈的存在のシテの「語り」において例が多いが、現在のワキ盛綱の「語り」であつても同じである。（朝長）のように、節に転調させることで焦点人物を切り替え、話中人物の心中やことばを、語り手の視点で説明し換えることなく「語り」に構成することは、特異な手法と言える。

次に、（八島）の前場の「語り」と比較したい。前シテ浦の老人とツレ浦の男との、源義経の大將軍振りと悪七兵衛景清と三保谷四郎との綴引きの「語り」に関する場面である。

〔堀池〕物語（シテ）「いて其比は元暦元年三月十八日の事成しに。平家はうみのおもて一町はかりに舟をうかへ。源氏は此ミキハに打出給ふ。大將軍の御出立には。あかちのにしきのひたゝれに。むらさきすその御させなか。あふミふんはり鞍かさにつつたちあかり。いちぬんの御使。源氏の大將けんひぬし五位のせう。みなもとのよしつねと。

カカル（シテ）名のり給ひし御こつからあつはれ大將やと見えし。今のやうに思ひ出られて候

（掛ケ合）ツレ^{（掛ケ合）}其時平家のかたよりも。ことはたゝかひ事をハリ。兵船一そうこきよせて。波うちきハに立て。くかのかたきを待かけしにシテ「源氏の方にもつゝくつはもの五十騎はかり。中にもみほのやの四郎と名乗て。まつさきかけて見えし處に

ツレ^{（掛ケ合）}平家の方にも悪七兵衛景清と名のり。みほのやを目かけ……

これは、佐藤継信・菊王の討ち死へと続く八島合戦の長大な「いくさ語

り」であり、話中に登場する人物も多く、場面も広大なわけで、（朝長）の「語り」に比して、語り主も大きな視野をもって語る。「いで」という語り起こしの語句に続いて、話中の時間、場面、義経の出立ちが語られるが、義経の化身である老人の「語り」であり、シテ義経のことは「今のやうに思ひ出られて候」と、語り手自身の心中表現を伴って語られる。しかしその語り口は（藤戸）と同じく、話中の場面を客観的に思い起こすかたちとなっている。

（朝長）の「語り」においても触れたように、（八島）にしても（藤戸）にしても、「……待かけしに」「……見えし處に」と、謡曲における「語り」の語り口は息の長い文体であるものが多い。しかし、「語り」がそういった文体をとつても、話中人物の言動を追うことが（朝長）の下掛り系本のやうに煩雑に感じられないのは、語り手の視線、或いは視点が（謡曲）における「語り」は、単に語り手の視線が移動したのか、又は語り手の視点が切り替わったのか、判別が難しい例も多い）変化する際には、「其時平家のかたよりも」というように焦点場面を絞ったり、「中にもみほのやの四郎と名乗て」と、話中の言動の主体となる人物の名前を明示するからである。

「いくさ語り」は必然的に、戦場等、広い話中場面を扱うが、そういった規模の大きな内容を演能において語り伝えて行くことが可能となるのは、仕方話等、視覚的な所作が支える場合もある。しかし、その中心的な要素は、（藤戸）（八島）の「語り」に見られるように、場面転換の常套的な字句表現を援用したり、言動の主体人物を明示して視点を切り替えた、語り手が説明的な語り口に徹して語ることにある。（朝長）の「語り」が、多くの話中人物を扱っているとも広い話中場面を扱っているとも言えないにもかかわらず、下掛り系本を中心として、語り口が不明瞭・未整理

なる点があることは、やはり〈朝長〉の「語り」の特徴と言えよう。

ところで、〈朝長〉の「語り」が、謡曲作品一般の「語り」と比して特異な性格を見せるのは、何故であろうか。自害の際の朝長の「路次にてかたきにも逢ならバ。いぬじにすべく候あひだじがいつかまつり候」「路次にて捨られ参せバ。雑兵の手にかゝらんことあまりに口おしうさぶらへば。爰にておいとまたまへらむ」(下間本③)と繰り返される述懐は、実際の心情吐露としては領けるものであるが、謡曲作者独自の創作によって生まれた表現とは考え難い。ここまで見てきた、時に不明瞭・未整理に見える〈朝長〉の「語り」についても、その多くはこの曲の作者の創作によるとは考え難い。これは、「語り」を綴るに当たって〈朝長〉作者が拠所とした、本説とも言うべき「素材」が関わっており、元々の「素材」の有していた表現・語り口・文体といったものが、その「語り」に反映している面がある為ではなからうか。

次節以降では、後場の朝長の霊の「語り」の考察と併せて、この「素材」をめぐって考察することにする。

四 〈朝長〉と軍記文芸

〈朝長〉後場の「語り」は、次の13段の「クリ」から展開する。

〔下間〕上(クリ)して／それ朝に紅顔有て。せいろにほこるといへとも。

(同意)／夕にハはつこつと成てかうけんに朽ぬ

(サシ)して／昔ハ源平左右にして。朝家を守護し奉り。

同(同音)／御代をおさめ國家をしつめて。はむきのまつりことすなをなりしに。保元平治の世のミたれ。いかなるときか来りけん。

下(して)／おもハさりにし弓馬のさはき。ひとへに時節。到来也

「それ」という発語の定型字句に続いて、『和漢朗詠集』の「無常」に

載る義孝少将の詩句を踏まえた対句的詞章を構成し、保元・平治の乱に触れる。この詞章については『平家物語』『永篋議』の本文等との関連が指摘されているが、他にも「二代后」の章段冒頭「昔より今に至るまで、源平兩氏朝家に召つかはれて、王化にしたがはず、をのづから朝權をかるむずる者には、互にいましめをくはへしかば、代のみだれもなかりしに、保元に爲義きられ、平治に義朝誅せられて後は、すゑぐの源氏ども或は流され、或はうしなはれ、」(寛一本)、太山寺本『曾我物語』の巻頭に見える「それ、日域秋津洲は、好文の族を寵愛せられずは、誰か万機の政を輔けん。また、勇敢の輩を抽賞せられずは、いかでか四夷の乱を鎮めん。しかる間、本朝にも中頃より源平兩氏を定め置かれしより以来、武略を振るい、朝家を守護し、互ひに名将の名を現すによつて、諸國の狼藉を鎮めて、四百回の星霜を送り畢んぬ。或ひは清和の後胤、又、桓武の累代なり。」等、源平兩氏を並べ称して章段を始める表現は他にも見られ、謡曲作者もそういった軍記文芸の本文構成に学んでいよう。又、源平兩氏の争いを保元の乱に遡るこいう本文を見ると、一段のワキ僧の名乗りで指摘したように、「扱も此度保元のみたれに。義朝都を御ひらさ候」とする本が多く見られるのも、謡曲作者が保元・平治の乱を一体視した故の本文であるかも知れない。この異文を単なる誤りと見ることは躊躇される。

因みに〈朝長〉の語り出しは、永正一三年三五空の奥書を有する作者附『自家伝抄』に名に見える〈悪源太〉のシテ義平の「昔ハ源平左右にして。朝家を守護し奉るといへ共、保元の代乱れ。親子兄弟をしわかつて。敵となり味方となる。去ぬる保元に。く。見方と有し清盛も。平治の今ハ敵となつて合戦数度に及ひたり」(貞享三年版本)という平治の乱の顛末の「語り」に承接継がれている。続く「クセ」において、

(クセ)下(同音)／去程に嫡子悪源太よしひらハ。石山寺に籠しを多

勢に無勢かなはねハ。力なくいけとられてつゝぬにちうせられにけり三男。兵衛佐をハ弥平兵衛か手にわたし是も都へそとられける。父義朝は是よりも。野まのうつみに落行。おさたをたのミ給へとも。たのむ木のもとに雨もりてやミくとうたれ給ひぬ。いかなれハおさたハゆひかひなくて主君をも。うちたてまつるそや。いかなれハこの宿のあるしハしかも女人のかひくしくもたのまれて。一夜の情のミか。かやうに跡までも御とふらひになることハ

上(して)そもく、いつの世のちきりそや

と、朝長の霊は、義平・頼朝・義朝と、自身の最期には触れずに親兄弟の末路について語り、「一切の男子をは。生々の父と思ひ。万の女人ハ生々の母とおもへとハ。今身の上にしられたり。さなからおやこのことくに御歎あれハとふらひも。まことにふかき心さしうけよるこひ申也。朝長か後生をも御心やすくおほしめせ」と、ワキ僧を父と、長者を母と見て、弔いを謝するのである。語り主である後シテ朝長が現世を思い起こして語る「語り」は、「……ちうせられにけり」「弥平兵衛が手にわたし是も都へぞとられける」「小宮本以外の上掛り系本は「手にわたり」と回想の文体であり、長者による目撃談の「語り」とは区別されている。

〔クセ〕の「去程に」以下が親兄弟の乱の顛末の「語り」となっている。この「さるほどに」という字句表現が、軍記文芸において章段の冒頭に置かれて、語り起こしの句として機能していることは、諸先覚の指摘するところであるが、謡曲作品においても、「さるほどに」という字句は例が多い。いま仮に現行観世流謡本詞章に基づく『謡曲二百五十番索引』によれば四十一例を数え、その内、修羅能の諸作品における用例は十五例にのぼる。現行二百五十番のうち修羅能は十七曲であることを思うと、修羅能におけるこの語の使用例は際立っている。又、軍記文芸と関わりを有する

〔鶴〕〔撰待〕等の作品にも例が見える。

例えば修羅能では、〔忠度〕 9段〔クリ〕冒頭の「さるほどに」の谷の合戦、今はかうよと見えしほどに、皆々舟に取り乗つて海上に浮かむ、〔敦盛〕 11段冒頭の「さる程に」、み舟を始めて一門皆々、舟に浮かめば、乗り遅れじと、汀にうち寄れば、御座舟も兵船も、遙かに延び給ふ」等、一の谷合戦の「いくさ語り」の冒頭句に用いられている。又、〔頼政〕では、宇治川の宮合戦の語り出しである9段〔クセ〕に「さるほどに」、平家は時を巡らさず、数万騎の兵を、関の東に遣はずと……とあり、11段〔ロソギ〕で「さるほどに」、入り乱れ、われもわれもと戦へば、頼政が頼みつる、兄弟の者も討たれければ……とある。「いくさ語り」中における語り手の視線の変化するところ等にこの語が用いられており、他に〔通盛〕〔應〕でも一つの「語り」の内に複数「さるほどに」が用いられている。なお、〔朝長〕 下間本②に「去程に朝長ハ。都大くづれとや覽にて」とあったものが、松井本②には見られないといったように、伝本によって用いられ方には差異が見られるものもある。以上の例は詳細にはそれぞれの伝本の本文の調査が必要になる。

軍記文学作品に限らず、例えば幸若舞曲作品においても「さるほどに」という語句は見られる。村上學氏は、「山中常盤」「信太」等十三の舞曲作品の「決まり文句」の用例調査を通して、舞曲における常套的「辞句」の用いられ方には曲毎に傾向に大きな相違が見られると指摘している。例えば、朝長の自害を語る舞曲「鎌田」には、場面転換の役割を担った語り出しの辞句として、類似辞句である「さるあひだ」が諸所に見られるが、「さるほどに」の辞句は見られない。他にも平治の乱に関わる「烏帽子折」「伊吹」等の舞曲においても、「さるほどに」が語り出しの辞句として用いられる例はごく少ない。因みに、謡曲における「さるあひだ」は、『謡曲二

百五十番索引』によると十一例見られるが、修羅能での用例はない。軍記文芸と関わる謡曲との関わりは少ないようである。詳細な検討の必要はあるが、謡曲に見られる「さるほどに」という字句表現、及び「さるほどに」を「語り」の冒頭に用いて小段構成をするという手法は、謡曲作者が軍記文芸から学んだものだったのであろう。

以上のように、〈朝長〉の13段の「語り」は、内容、表現・文体において、先行する軍記文芸との関わりが諸所に窺える。前シテ長者の「語り」とは性格を大きく異にするのである。前場の語り主長者と後場の語り主朝長という語り手の人格の相違は、それぞれの「語り」の詞章の性格に反映されている。

〔朝長〕 結束14段は、朝長が自身の最期を語る「いくさ語り」である。

〔松井〕 (中ノリ地) 同(同音)はたハ白雲こうようの。ちりまじりた、かふに。うむのきハめのかなしさは。大くつれにてともなかつ。ひさのくちをのふかにいさせて馬の。ふとはらに討つけらるれば馬はしきりにはねあかれは。あふみをこして。おりたゝんと。すれともなんきの手なれば。あしもひかれさりしを。のりかへにかきのせられて。うきあふみちをしのぎきてこの。あふはかにくたりしか。雑兵の手にからんよりハとおもひさためて腹一もんしにかき切てそのまゝにしゆらたうにおちこちの、土となりぬるあをのか原の。なき跡とひてたひ給へ。
ナキアトラトイテタヒタマヘ(原野事)

中ノリの謡で謡われるこの小段は、「修羅ノリ」とも呼ばれる。修羅ノリはシテの最期の様や修羅道における苦患を語るものとして修羅能の最終段に用いられる例が多い。〈朝長〉におけるシテの謡を交えない一息のツケ謡は例外的であるが、観世元雅作の〈歌占〉にも例がある。

結末の「そのまゝにしゆらだうにおちこちの」が、〈清経〉最終段の詞章の影響を受けていることは先覚の御指摘通りだが、冒頭部「はたハ白雲こうようの。ちりまじりた、かふに」以外、縁語・掛詞といった修辭表現がほとんど用いられていないことも注目される。掛詞とも解せる「うきあふみちをしのぎきて」の一句も、下掛り系本の遊音・下間・了随・六徳等の本は欠いており(ソウ本はこの一句を抹消する)、〈朝長〉にもとからあつた詞章であるかは疑問である。

波線を付した箇所は前場の長者の「語り」と共通する詞章である。この小段は、シテの最期を構成するという修羅能一般の定型に倣って、長者の「語り」には見られなかつた矢傷を負つた様を交えて朝長の最期を語るものである。但し、「なんぎ」「雑兵」といつた語句は、現行謡曲詞章を見る限り、用例の限られるものである。この段の詞章は、前場の長者の「語り」の表現を引用して再構成したものと見てよい。後場の詞章にも、前場の長者の「語り」が影響しているわけである。

先に長者の「語り」には、本説つまり「素材」となったものが有していた性格が影響しているのではないかと想定したが、〈朝長〉の「素材」つまり本説作品と考えられる『平治物語』本文は、長者の「語り」とどのような関係にあるのだろうか。

〈朝長〉と『平治物語』との関係について、里井陸郎氏が「原典になじまぬ自由な脚色においてこの曲ほど徹底した修羅能はないといつてよい」といふよりは、一言一句たりとも平治の文章をうつした箇所は見あたらないとし、西野春雄氏は「朝長」は『平治物語』巻二「義朝青墓に落ち着く事」に取材しているが、本説通りではない。重傷を負つた朝長は父義朝に討たれたのを、朝長の自害に脚色し、また青墓宿の長も厳密には目撃

していない。しかし、そうした本説を離れて、というよりは本説にとらわれず自由に創作の筆を進ませている点に注目すべきであり、〈作り能〉的手法が本曲の特色でもある」と指摘している。両氏共に〈朝長〉と『平治物語』本文との間には隔絶があるとし、特に西野氏は「作り能」的手法と、〈朝長〉作者の創作性を認めている。他の先覚も、〈朝長〉の本説を『平治物語』とすることにについては懐疑的・否定的である。

確かに、『平治物語』諸本には朝長の死を自害とすることは見られない。これが『平治物語』非本説説を支持し、〈朝長〉に謡曲作者の創作を認める最大の要因である。だが、天野文雄氏が室町初期には存在したらしいという歴史書『神明鏡』における朝長自害説を、北川忠彦氏が『帝王編年記』や百二十句本『平家物語』「劍巻下」等の朝長自害譚を指摘しているように、謡曲以前にも朝長自害説を載せている作品は幾つか見られる。自害説から即、〈朝長〉作者の創意へと繋げることは出来ない。

又、里井氏が念頭に置いた『平治物語』は、主に金刀比羅本系統であるようで、能楽研究の側から〈朝長〉の本説を考える際も、主に金刀比羅本系統の『平治物語』が参照されてきた。しかし、『平治物語』諸本中で古態を留めるとされる陽明学習院本系統の本文を見ると、〈朝長〉との共通点が幾つも見出せるのである。例えば学習院図書館蔵九条家旧蔵本「金丸尾張より馳せ上り、義朝の最後を語る事」の件りである。

同五日、左馬頭義朝が童金丸、常葉が許に忍びて来り。馬よりくづれ落、しばしは息たえて物もいわず。ほとへておきあがり、「頭殿は、過ぬる三日の暎、尾張の国野間の内海と申所にて」(「陽本松本」)尾張国野間と申す所にて、重代の御家人長田四郎忠宗が手にかゝりて、うたれさせ給ひ候ぬ」と申せば……金丸、路次の事をぞ、語申ける(「陽本」)金丸語り申しけるは「松本」金丸なみだをのこひ申けるは。

波線を付したように、学習院本が義朝・鎌田の落ち行く先を「野間の内海と申す所」とするのは、〈朝長〉の長者の「語り」に見える地名と共通する(内海の名は諸本により二、三箇所見えるが金刀比羅宮蔵本は「尾張の内海」とし、陽本・松本は別の箇所では「尾張国野間の内海」とし、古活字本も「尾張國智多郡野間の内海」とする箇所がある)。「路地」も〈朝長〉に見える語句である。文脈は相違するが、学習院本には、金刀比羅宮蔵本には見えない「義朝、北陸道へ趣かば、此事聞て、都へ馳のぼる勢おほからん。誰ともしらぬ雑兵にあひて大死せん事、口惜かるべし」(義朝敗北の事)、「上総介八郎広常、人数あまたにて、路次も難儀に候はんずれば」(金丸尾張より馳せ上り、義朝の最後を語る事)、「鎌倉悪源太は、近江国石山寺の傍に、重病にかされ居たりけるを、用心はきびしくせらる、力なくて、京にしばらく徘徊て六波羅に時々伺寄し程に、運のきはめにて虜られたりとぞ申ける」(悪源太誅せらるる事)等の、〈朝長〉における長者や朝長の「語り」(5・13・14段)の語句・表現と重なる例が見出せる。

何よりも注目されるのは、以下の朝長最期の様が、義朝付の童の金丸の報告談という「語り」の形式によって展開されることである。

夜に入て、頭殿、宿を出させ給所に、中宮大夫進朝長、竜華越の軍に膝のふしを射させて、遠路を馳過、ふかき雪を徒にてわけさせ給ひしほどに、腫損じて、一足もはたらかせ給へきやうなし(「松本」)あしものびさせ給はんとも覺えず。「此いた手にて、御供申べしとも覺えず。とうくいとまたばせ給へ」と申されしかば、頭殿、「こらへつべくは供せよかし」と、世にあはれげにて(「陽本」)世にあはれげにて(ナシ)仰せられしかば(「松本」)かながべしとも覺候ずゆひかいなきものゝ手にかゝらんよりは御手に(大夫進殿、泪をながさせ給て、

「かなふべくは、いかでか御手にかゝらんと申べき」とて、御頸をのべさせ給たりしを、頭殿、やがて打ちまいらせて、きぬ引かづけまいらせて、「大夫進が足をやみ候。不便にし給へ」とて、出させ給ひぬ。

ここに見える朝長の述懐をめぐって、日下力氏は、「しかば・て・とて」の頻用によって長文を形成する文体は未整理であり、練られた文章とは思われないとし、「創作」というよりは「素材」が「生に近い形のまま利用」されている可能性があるとし、「こうした文体からは、芸能としての語りを連想することも難しからう」とする。稿者が青墓長者の「語り」の特徴について分析したものは、日下氏の御指摘に通ずるものがある。下掛り系本諸本における長者の「語り」は、特にこの学習院本『平治物語』と共通する要素がある。

以上のような陽明学習院本系統『平治物語』本文と謡曲〈朝長〉の「語り」との本文の類似という共通する点は、『平治物語』中巻の諸所に亘っており、これをもって、陽明学習院本系統『平治物語』を謡曲〈朝長〉の本説とするわけには行かない。しかし、これほど類似した語句・表現が『平治物語』の古態を留めると言われる本に見られ、又、「語り」という形式を共に有している以上、やはり〈朝長〉は『平治物語』本文と無関係ではないと思われる。先に述べたように、他の謡曲作品にも用例の見られない語句が謡曲作者の創作によって〈朝長〉の詞章に組み込まれたとは考えられない。

五 謡曲〈朝長〉から『平治物語異本』へ

ところで、北川忠彦氏が謡曲〈朝長〉等と同じく朝長自害譚を展開するとして注目した、長谷川端氏御所蔵の『平治物語異本』がある。長谷川氏によると、書写は慶長を下らず、天正・文禄に遡り得るかという、中巻の

みの零本だが、この本の「ともな（本題）か□事」は、「去程□、朝長はるかに落行給ひけるか、ミヤこ大くづれ、その上りうげにてひざのくちをいられ給ひ」（以下、濁点稿者）と始まる。朝長が「ミヤこ大くづれ」で「ひざのくち」を射られたとする本文は、陽明学習院本系統・金刀比羅本系統・版行本系統等の『平治物語』諸本、舞曲「鎌田」、『義経記』（田中本・古活字本）には見られないわけで（但し、古活字本『義経記』は「弓手の膝口を射られて」とする）、この本のみ謡曲〈朝長〉とは重なるのである。

『平治物語異本』に描かれる朝長は、金刀比羅宮蔵本や古活字本等と同様、一旦は再起を期して「甲斐、しなの」に向かうが、傷が痛み「大はかのしゆく」へと戻り、「かまたひやうへ正家」を頼る。鎌田は義朝の悲嘆に配慮して、義朝に隠して朝長をかくまっていた。

さるほどに、義朝ハ、天あけなばさうたんより川ふねにめされて、おハりのなんかいへ御おち有べきよしを申。朝長この事をき、給ひ、とても此度は御とも申がたし。さあらば、此しゆくにと、一人のこりて、さうひやうの手にかかり、うきなをながさんもちをしければ、じがひしてこそと思ひさだめ給ひ、夜はんばかりの事成に、おしてをしおきなをり、にしの方にむかひ給ひ、南無あみだ仏くと、二こゑとなおおハしまして、こしのかたなをすわとぬき、はら一もんじにかききつて、ゆんでへかつはとをし給ふ。

尾張へ落ち行く義朝の経緯は、〈朝長〉の下間本①・松井本①と、朝長の自害の様は、下間本②・松井本②等の詞章と、波線部・二重傍線部の本文がそのまま重なる。一文字に割腹したという件は、〈朝長〉14段にも「おもひさだめて腹一もんじにかき切て」と見える。念仏を唱えて自害するという件は舞曲「鎌田」にも見えるが、「鎌田」では、朝長は鎌田正清に介錯をさせたことになっており、一文字に掻き切ったとするのは、管見では

この『平治物語異本』と謡曲〈朝長〉のみなのである。

朝長の最期に鎌田が関わることは、〈朝長〉においても舞曲「鎌田」においても注目されるが、鎌田は、『平治物語異本』では「かまだねん仏のこゑにおどろき、いそぎはしりまいりて、しやうじをあけて見奉ば、はや御じがひましくて、今をかぎりとミへ給ふ。かまだ、なくく義朝の御前にまいり、此よしを申あぐれば」と自害した朝長を最初に発見し、義朝に告げた人物となっており、これも〈朝長〉下間本②・松井本②と同様である。続く、朝長を目にした義朝の愁嘆振りは、舞曲「鎌田」においては「御落泪ひまなし」と簡潔で、介錯を乞われて逡巡する鎌田の描かれ方には及ばない。しかるに、『平治物語異本』に見える義朝は、

義朝おどろきさわぎ、はしる共なく、たをる共なく、朝長のおハせしところに入てミ給へば、御はだきぬはくれないにそみて、中々ぬもあてられぬ御有さまなり。さすがたけき義朝も、大かたのなげきにこそ、なミだもこゑも出べけれ たなごころをあわして、これはとばかりのたまひて、しばしあきれておハしけり。

と、涙にくれる父親である。父子の恩愛に厚い義朝像は〈朝長〉や陽明学習院本系統『平治物語』の本文に通うもので、「あはれ不覚なるものかな。頼朝は少くともかやうにはあらじものを」と、朝長を窺めた厳然とした父親とする金刀比羅宮蔵本や古活字本『平治物語』とは距離がある。

波線を付した、紅に染まった肌衣は、〈朝長〉下間本②・松井本②そのまま重なる本文であり、〈朝長〉と『平治物語異本』本文との関連の深さが窺える。両者の関連は、続く朝長の述懐を見ると疑いようがない。

ややほどへて、なミだをながし給ひ、さていかに思ひさだめてじがひしけるぞとのたまへば、朝長いまのしたにてのたまひけるハ、されバ、ミヤこにてのかつせん、りうげにてのたゝかひに、ところく

きづをかうぶり、いぶきのゆき、きのふの風に、きづもつての外におこり候て、いかん共すべきやうもなく候ゆへ、道もゆきやらせず候。此ま、御ともつかまつり度ハぞんじ候へ共、甲斐なき命にて、よろくとしたるていにて、まかり下り候ハ、さう人ばらにめしとられ、いぬじにすべく候。さ候いてハ、ゆみやとる身の、やにあたり、かたきの手にかゝつてきへなん事、もとよりこうする所なれ共、誠に今どの御せんとをもミとけ申事もなくて、かやうに成はて候事、返くも云かひなき者かなとおほしめして候ハ、つれ共、ろしにてかたきにあひ候ハ、さう兵の手にかゝり、げんじのなをくださん事、あまりにくちをしくぞんずるなれば、たごころにてこそ、御いとまたまハる也とのたまひもあへず、こときはて給ふ。

傍線を付していないあたりの本文は、この章段の冒頭部の本文を朝長の述懐の言葉に採り込み直したものであり、『平治物語異本』の朝長述懐の本文は、波線・二重傍線を付した通り、〈朝長〉の下間本③・松井本③の詞章と細部の表現に至るまで重なる。青墓長者の「語り」を中心とした謡曲〈朝長〉の詞章と、『平治物語異本』「ともなか□事」の章段の本文とが、密接な関わりを持つていることは明白である。

しかし、『平治物語異本』が謡曲〈朝長〉の本説であるのかという点、どうやらそうではないらしい。

この『平治物語異本』の本文と『平治物語』諸本との本文については、長谷川端氏は、杉原本や八行本との近似を指摘しておられるが、この章段の前後にある「いぶきおちの事」や「よしともふしわかれおちの事」等の章段、そして「ともながじがひけうやうの事」等の章段を見ても、この「ともなか□事」の章段は、金刀比羅本系統など、陽明学習院本系統よりは後出とされている本文に謡曲〈朝長〉の詞章を増補・改編した章段と考え

ざるを得ない。

それは、例えば、冒頭の「ミヤこ大くづれ、その上りうげにてひぎのくちをいられ給ひ」という本文の在り方に端的にあらわれており、朝長は述べた場面では「ミヤこにてのかつせん、りうげにてのたゝかひに」ところへ「のきづをかうぶり」と、『平治物語』他本の本文と同様、龍華の地名しか挙げない。『平治物語異本』は、謡曲〈朝長〉から「都大崩」の語を採り入れて、冒頭部の本文を増補したのである。

他に、『平治物語異本』は鎌田の名を「かまたひやうへ正家」(平治の乱直前の除目において正家と改名したことは物語諸本に見えるが、乱後について述べた記事でも正清・政清・まさきよとする)とし、義朝の落ち行き先を「おハりのなんかい」とするが〈朝長〉は採っていない。本説の固有名詞について、謡曲作者が創出して詞章を綴るといふことは考え難いことである。何よりも、この『平治物語異本』が〈朝長〉の本説であれば、本文に未整理な感のある「語り」の詞章が生成されることは考えられない。

これだけ似る本文を有するものの、『平治物語異本』が〈朝長〉の本説であったとは認められない。しかし、両者が、本稿で「語り」の「素材」となったものの存在を想定したように、同一或いは同種の「素材」から、別々に生成されたのかというと、そうでもないらしい。『平治物語異本』が謡曲〈朝長〉の詞章を踏まえているらしい箇所が見るのである。

それは、『平治物語異本』の本文に「二重傍線を付した箇所である。「おハりのなんかいへ御おち有べきよしを申」、「にしの方にむかひ給ひ、南無あミだ仏く」と、「二こゑとなゑおハしまして」、「さていかに思ひさだめて、じがひしけるぞとのたまへば」、「ろしにてかたきにあひ候ハ、さう兵の手にかゝり」等の本文は、詳細に比較すると、前節において古態を留めると指摘した下掛り系本〈朝長〉の詞章ではなく、全て、後出の本文と推定

した上掛り系本の詞章と一致するのである。何れも細かい異文であるが、例えば、下掛り系の本文は、松井本①にある「野間のうつミとやらんへ御落有べきとなり」を「御入あるべし」(下間①・遊音本は「御入あるべし」と異文注記とする。これは下掛り系本文のある程度一貫した傾向であり、13段「クセ」の上掛り系本に「三なん。兵衛のすけをバ弥兵衛が手にわたり」(松井本)とある詞章を下掛り系本は「弥平兵衛が手にわたり」(下間本、但し室末本は「手にわたり」とし、14段「中ノリ地」に見える「うきあふミぢをしのぎきてこのあふはかにくだりしが」(松井本)を、下掛り系本は「あふはかにおちつき」とする。こういった具合に、下掛り系本は、朝長をはじめ、義朝・頼朝等の源氏方の消息をめぐって、武士らしく、受動的・敗戦的な表現を避けているのである。

『平治物語異本』「ともなか□事」の章は、この後、朝長のことを、「御としをおもへば、十六さいに成給ふ。雲の上のまじはりにて、りやう、ことがら、ゆふにやさしくおハしまし、ぶげいにかぎらず、しいかくわんげんのミちもたつしやにて、なさけふかき人にておハせしかば、」と悼み、義朝は保元の乱に斬った弟乙若の今際の言葉を思い起こして恩愛の涙にくれ、この章段は閉じる。金刀比羅宮蔵本『平治物語』に「朝長生年十六歳、雲の上のまじはりにて、器量・ことがらゆふにやさしくおはしければ(義朝奥波賀に落ち著く事)と見える本文を更に進め、朝長を、武芸のみでなく、詩歌管弦の文才にも長け、情愛深い人物であったとすることは、朝長最期譚の極まったかたちとも言えるが、人間の恩愛の有り様を前面に出し、西に向かい念仏を唱えて最期を迎え、文武両道の公達と描こうとするところに、〈朝長〉ばかりでなく、世阿弥作修羅能のシテである教盛・忠度・清経等の平氏の公達の形容と共通するものを見出すのである。

以上のことから、『平治物語異本』「ともなか□事」の章は、謡曲〈朝

長〉の上掛り系本の詞章を採り入れて本文を形成しているということが言えると考えられる。

世阿弥作の修羅能等を中心に、作品のある記述が『源平盛衰記』にのみ一致する等、謡曲が本説と互いに影響し合っていることが指摘されることがある。しかし、その影響・受容は、本文の面でも一致することは稀で、明確な影響関係を認めるのは難しい場合が多い。そういった中で、〈朝長〉が、『平治物語異本』という、いわば本説であつても不思議でない作品の改編・改作に逆に関わつたのであるから、これは修羅能作品一般においても、稀な例である。『平治物語異本』を謡曲〈朝長〉の本説作品として認定出来ない以上、本稿の目的とする青墓長者の「語り」の分析に用いることには限りがあるのかも知れない。だが、『平治物語異本』が、〈朝長〉に注目し、主にその「語り」の詞章を採り入れているという、その継承関係自体が示唆するものは決して小さくない。

六 「語り」を始発点とした〈朝長〉の構想

謡曲〈朝長〉の前場における青墓長者の「語り」は、『平治物語』の陽明学習院本系統という古態本系の本文と通ずる性格を有していることを確認した。だが、古態本系の『平治物語』と〈朝長〉とは、その成立にかなりの年月の隔たりがある。先覚が指摘するように、『平治物語』は琵琶語りを伴つて実際に語り伝えられた芸能としての側面も有していたが、〈朝長〉の形成と何らかの関わりがあるのだろうか。

天野文雄氏は、長者の「語り」に幾つか見られる「鎌田殿」という呼称に注目し、鎌田に縁のあつた遊女による「語り」を想定された。北川忠彦氏も、舞曲「鎌田」「烏帽子折」等の作品から『義経記』、古浄瑠璃「待賢門平氏合戦」等までも視野に入れて、平治の乱の後日譚を語つた「女語り」

の存在を想定された。本稿で言う長者の「語り」の取材源である「素材」を、実際に語り伝えられたであろう青墓宿や鏡宿（『義経記』巻第二では、牛若を見た鏡宿長者が亡き朝長の面影を語る）等の宿駅における「女語り」に求められたことになる。

確かに、『會我物語』等をはじめとして、軍記文芸と「女語り」との関わりは早くから指摘されている。朝長の述懐の言葉において、下掛り系本の下間本③は「雑兵の手にかゝらんことあまりに口おしうさぶらへは」とし、ソウ本は「口おしうさぶらへは」、了随本「くちおしう侍へハ」や六徳本「口惜侍らへ」のように、訂して書き入れている本がある。全て「候」と表記している上掛り系本に比して、女性の語り口を意識しているかのような形跡がある。

しかし、青墓宿等の「女語り」は、その実態を確かめる術はない。本稿で検討したような謡曲本文の分析から、長者が自身を「わらハ」と呼んでも、それは謡曲作者が「女語り」という形式で〈朝長〉の「語り」を構成したということであり、〈朝長〉の「素材」に「女語り」が関わつたという証左にはならない。

〈朝長〉は、色々な小書きを伴つて、現在に至るまで、重い曲として演じ継がれている。では、〈朝長〉の影響下にある謡曲作品はどうかというと、能楽の演出史をめぐって、前・後別人格のシテが立てられる作品の〈藤戸〉（船弁慶）等の曲が指摘されるほどである。〈朝長〉の「語り」が影響している作品は容易には認め難いのである。

そういった中で注目されるのは、『平治物語異本』に〈朝長〉の「語り」の詞章の影響が認められることである。『平治物語異本』が何故〈朝長〉の「語り」を採り入れたのか。それは、『平治物語異本』が生成される時代において、実在しない源朝長の最期に立ち会つた長者の実際の「語り」

が謡曲〈朝長〉に間接的に留められている、と見たからであろう。その意味で、〈朝長〉は本来本説となるはずの『平治物語』や平治の乱後日譚の、享受・変遷(『平治物語異本』に近いとされる杉原本や八行本の本文は、完成形にある『平治物語』を崩して行く方向にもあるとされる)ともあり、敢えて「成長」ということは避けておくに関わった珍しい謡曲である。又このことは、青墓長者の「語り」が、〈藤戸〉や〈八島〉に見たような謡曲における「語り」の特色の枠から外れ、他の謡曲作品に影響が見出せないことの要因であろうと思われる。

この特徴的な「語り」が、〈朝長〉においては、一曲の随所の詞章に影響を与えていることを指摘した。これは、〈朝長〉において、青墓長者の「語り」が一曲の中心的題材として構成されたことを意味している。その為、源朝長をめぐる「いくさ語り」を展開する作品として、あくまで長者の「語り」に沿う以外に謡曲作者には詞章を構成する自由は無かったと思われる(本稿では採り上げなかった、〈朝長〉の主に演出面での特色のある10〜12段の朝長追善の観音鑑法の段を除いては)。長者の「語り」を作品の中心に据えて一曲を構成することが、謡曲作者の〈朝長〉構想の始発点であったのである。

〈朝長〉は「世阿弥の完成させた夢幻能の形式を完全に踏襲している訳であり、前シテを後シテの化身に変えるだけで夢幻能となりえてしまうのである」として、構想においては世阿弥の夢幻能(修羅能)の形を乗り越えていないとも評される。しかし、本稿で見たように、前シテの「語り」は青墓長者の目撃談としてこそ可能となる「語り」の特色を有しており、朝長の化身を前シテとして設定しては成立しない「語り」である。(朝長)構想の始発点には、青墓長者の語る「語り」が存在するのみであったので

はなかるうか。「語り」の「素材」となったものが、口承性のものであったのか、書承性のものであったのか、不明であるが、青墓長者をシテとすることは、「素材」が謡曲作者に要求した自然な構想であったのであろう。

以上の推論に立つと、後場に朝長という別人格のシテを立て、修羅能として〈朝長〉を構えることは、長者の「語り」を活かすために付随して生まれた構想と考え得るのである。前・後場でシテが別人格であるという「朝長型」は、長者の「語り」を始源として、自然と生まれたかたちであった。突飛な推論であるが、長者の「語り」はこのような推論を促すほどに特異且つ特徴的である。

そもそもこのような「語り」を謡曲作品として構想することさえ、世阿弥の作能の枠組みを越えていたのかも知れないのである。

[注]

1 段・小段等の認定については、伊藤正義氏『新潮日本古典集成 謡曲集中』所収〈朝長〉に従い、小段名を「」で括弧して示した。その他、謡曲詞章の役名等に「」で括弧して示したのは、原本にあるものではなく稿者の注である。又、以下謡曲詞章について、節付のされていない詞の部分には「」を、節付のされている節の部分には「／」を付してあらわす。

2 「舞歌二曲を本風とする現在能―修羅能の応用風―」『国文学研究』86一九八五年六月(『歌舞能の確立と展開』二〇〇一年二月、ベリカン社刊に再録)。本稿において参照した〈朝長〉謡本は、以下の通りである(「」内は『補訂版国書総目録』「能の本」所掲の番号)。

3
▽下掛り系 ○遊音：天文元年三月写「遊音抄」本(磯剛帖松風箱翻刻本文に拠る)(天理図書館蔵)(9) ○道入：天文頃写道入署名本(東京大学史料編纂所蔵)(12) ○下開：天正末頃写下開少進手沢島飼道晰節付本(法政大学能楽研究所蔵)(37) ○ソウ：室町末期写謡本(ソウル大学校図書館蔵) ○南都：慶長頃筆南都社家旧蔵本(鴻山文庫蔵) ○室末：室町末期筆下掛り無章句本(鴻山文庫蔵) ○了随：慶安承応了随本転写本(了随三百番本)(鴻山文庫蔵) ○六徳：江戸中期写下掛り横本番外謡本(六徳本系金春流謡本)(法政大学能楽研究所蔵)(番外5)

▽上掛り系 ○宗節：永祿元龜天正元盛・宗節章句本(鴻山文庫蔵) ○元忠：

元龜二年写親世元忠宗節節付本(東京大学史料編纂所蔵) (17) ○堀池：慶長頃写堀池宗活筆本(神戸松蔭女子学院大学蔵) (23) (以下、「堀池」一本他曲についても詞章は同大学所蔵本に拠る) ○松井：淵田虎頼等節付本(八代松井家一番本(東京松井文庫蔵) (26) ○淵田：天正頃写堀池・淵田百拾九番本(鴻山文庫蔵) (30) ○小宮：天正以前写小宮山藤右衛門元政本(鴻山文庫蔵) (32) ○松平：慶長以前写松平伊豆守旧蔵本(鴻山文庫蔵) (53) ○下村：天正十七年写下村徳左衛門父子節附本(瀧川豊前守旧蔵本)(法政大学能楽研究所蔵) (29) ○妙庵：慶長三年写妙庵玄又手沢五番綴本(東京松井文庫(八代市松井家)蔵) (51) ○身愛：慶長十一年写親世身愛筆譜本(筑波大学附属図書館蔵) ○石田：元和八年以前写石田少左衛門友雪旧蔵本(鴻山文庫蔵) (67) ○元和：元和六年卯月本(元和九年刊本)(国書刊行会復刻版に拠る) ○福王：江戸中期写福王系番外謡本(親世流五百番謡本(法政大学能楽研究所蔵) (番外2) 以下、各本の本文については、適宜校訂して示す。

義朝親子の消息・朝長の最期を語り伝える青墓長者は、謡曲(朝長)における「語り」を担う「語り手」と言うべき立場にある。だが一方では、舞台上に前シテ青墓長者としてあらわれる能(朝長)の「演じ手」でもある。「語り手」であり、同時に「演じ手」でもある青墓長者の性格は、後シテ朝長と別人格の存在であることも考え併せると、「補え手」とでも称して区別すべきであるが、本稿では仮に「語り手」とした。

車屋本の詞章は『日本古典全書 謡曲集』に拠る。
岡田安代氏『平治物語』第四類本の方法―「さるほどに」の機能―『日本文学』一九八五年十二月、犬井善壽氏『保元物語』『平治物語』と琵琶語り―定型語句「さる程に」を『平家物語』の琵琶語りと比較して―(『軍記文芸研究叢書12軍記語りと芸能』二〇〇〇年、汲古書院刊所収等。
以下の修羅能の詞章は『日本古典文学大系 謡曲集』に拠る。
「幸若の統辞法へのアプローチ―中間的試論として―」『幸若舞曲研究 第五卷』一九八七年二月、三弥井書店刊、所収。

舞曲「鎌田」については、『幸若舞曲研究 第二卷』一九八一年二月、三弥井書店刊、所収の詞章と注釈を参照した。
「作品研究 朝長」『親世』一九七一年三月。
「元雅の能」『文学』VOL.41一九七三年七月。
「能における語り物の摂取―直接体験者の語りをめぐって―」『芸能史研究』66一九七九年七月。

「舞曲「鎌田」と平治物語」『幸若舞曲研究 第三卷』一九八三年一月、三弥井書店刊、所収。
陽明学習院本系統『平治物語』中巻については、学習院図書館蔵九条家旧蔵本を底本とする『新日本古典文学大系 保元物語 平治物語 承久記』に拠り、適宜

14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4

陽明文庫蔵本を底本とする『新編日本古典文学全集 将門記 陸奥語記 保元物語 平治物語』を、島原図書館蔵松平文庫本の本文は、笹英治氏編『平治物語研究 校本篇』一九八一年、桜楓社刊を参照した。又、金刀比羅宮蔵本と古活字本の『平治物語』は、『日本古典文学大系 保元物語 平治物語』所収の本文に拠る。「金王丸の報告談考」『平治物語の成立と展開』一九九七年六月、汲古書院刊所収。
以下、「平治物語異本(奪本)」「軍記と語り物」12一九七五年一〇月の翻刻・解題に拠る。
16 『日本古典文学大系 義経記』に拠る。
17 天理図書館蔵謡曲別集百番本(石山義衡) (『新謡曲百番』一九二二年、博文館刊所収)に「中にも次男朝長は。大崩れに痛手負ひ。行歩進退せざりしかば。生害をとげ終けり」とあり、樋口本(曾頼朝) (田中允氏『古典文庫 未刊謡曲集 三』所収)に、「我は義朝の三男兵衛佐頼朝なるが。都大崩にて親子諸共に落のび候所に。守山にては既に雑兵の手にかゝらんとせしを」とある。(石山義衡)は近世初期の作らしく、(曾頼朝)は大永四年(一五四四)成立の作者附『能本作者注 文』に名に見える作品であるが、田中氏が古本系とする仙台本(『古典文庫 未刊謡曲集 十五』翻刻・解題)には、「大崩れ」の名が見えない。番外謡曲の中には幾つか見える地名であるが、何れも(朝長)の影響下にあるものか。

18
17
16
15

〔付記〕本稿は平成十五年度軍記と語り物研究会大会(八月二四日於千葉大学)における口頭発表をもとに成稿したものです。日下力先生をはじめ席上御教示頂いた先生方に、記して御礼申し上げます。また、本稿を成すに当たって、神戸松蔭女子学院大学附属図書館、東京大学史料編纂所、法政大学能楽研究所等の諸研究機関に資料の閲覧の許可を賜りました。記して御礼申し上げます。
(いわぎ けんたろう 筑波大学大学院文芸・言語研究科 学生)

14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4